

由で奉天方面に避難したらしいとの情報を得たので、朝鮮人の迫害を避けながら古茂山から茂山、恵山鎮を経由、徒歩で豆満江ぞいに中江鎮まで行き、渡河して、臨江県に到着、そこからさいわいに動いていた列車で通化に行き、社員家族が撫順の国民学校に避難していることをつきとめ、行き別れて一か月目の九月九日、家内と再会することができた。人間の奇しき運命というのだろうか、ただ感無量のものがあった。さいわい撫順は露天掘りをはじめとして、数々の炭鉱、および液化工場等があり、満鉄の街といっても過言ではなく、さっそく炭鉱勤務となり、ソ連軍の命で石炭掘り続け、ソ連軍票による給料を支給された。家内もさいわいにも十二月八日満鉄病院で長男を出産、栄養不良の母乳不足で苦労させられたが、どうにか生き延びられたことは感謝の外ない。そして着のみ着たまま羅津を出たときと同じ姿で、無蓋車に乗せられ、撫順を出発、コロ島埠頭から昭和二十一年七月六日舞鶴港に上陸、日本に帰ってきた。満州での苦労、そして同胞のみじめな姿を目のあたりにし、なぜに、どうしての感を強くした。内地に引揚げてきても住

むに家なく、食うに職なき状態、良く今まで生きてこられたと感謝の気持ちでいっぱいである。

妻死亡、子どもだけの引揚げ

福島県 遠藤 正雄

私は知人の紹介で北鮮の製鋼会社の職工として就職した。日本では給料が安く、生活が容易でないので渡鮮したのだ。昭和十四年五月、家族とともに北鮮で生活を始めた。生活は豊かで、不自由などしなかった。敗戦二年前頃から、急に物資不足になり、内地への交通も絶え、きびしい生活になってきた。

昭和二十年一月、とつじよ軍隊に召集され、釜山部隊に入隊、八月十五日の敗戦、九月召集解除となったが、北鮮には帰れないので、家族を案じていた。知人を尋ねたり、北からくる人びとに聞いてまわり、待っていた。そのうち、米軍に保護され、十月初め、米軍の船で送還、故郷にたどりついた。

毎日実家の手伝いをしながら家族の情報を待っていたところ、翌年七月頃、突然電報があった。「母は京城にて死亡、伝染病発生のため、佐世保沖に停泊中」。私は子どもを迎えにいった。子ども達は、母の遺骨を胸に抱いて顔をみせた。涙の対面がやっとできたのだ。

このせつない思い出は、なんとも言い表すことはできない。

私の持っていた食べ物を与え、他の二、三家族にも少しずつ分け与え喜んでもらった。子ども達は、ぼろぼろの服装で乞食同然だった。京城まで朝鮮人から食べ物をもらい、やっとたどり着いたとのこと。一番下の子が病気になる、一足遅れて帰ることになった。妻は腸カタルになり、死亡したとのこと。私はこれを聞き、あのととき日本に帰せば良かったと男泣きに泣いてしまった。

子ども四人が実家に着いてからは、早朝から実家のために手伝い、食べるために励んだ。その後、あき家を見つけ、そこに住み、後妻をもらい生活を営んだ。終戦当時の食糧の配給では腹がへるので、仕方なく、なれない山仕事（木炭焼き、そり引き）をやった。そのうち、大

熊町に原子力発電所の建設が始まり、賃金は増加し、生活は楽になった。子ども達は大きくなり、社会人となって一人立ちできるようになった。

今までのものすごい苦労の甲斐あって、生活に恵まれてきた。

私は、今年敬老の日（誕生日）をもって満八十二歳を迎える。今からふりかえれば、人生はなんと変転きわまらないことか。まるでドラマのようにも思える。心の余裕ができたからだと思う。

これからは、余生をたいせつにして過ごそうと思っている。

家族七人ぶじ帰国

群馬県 中洲 武八

誰も忘れることのできない八月十五日、この日の終戦の詔勅を、南朝鮮の慶尚北道の竜党という、小さい街の自宅で聴きまして涙を流しました。